「国語教育研究」第六十号（平成三十一年三月刊）

国語学習の回想に資する過去概念の哲学的考察

鈴木愛理

「わたし、北風の国のオーロラのことを考えてたのよ。あれがほんとにあるのか。あるように見えるだけなのか、あんた知ってる？／ものごとってものは、みんな、とてもあいまいなものよ。まさにそのことが、わたしを安心させるんだけれどもね。」

トーベ・ヤンソン（山室静訳）『ムーミン谷の冬』三一～三二頁

1　はじめに

国語学習の回想――自分が受けてきた国語学習や言語生活を振り返ることがその後の国語学習や言語生活を支え励ましていく可能性については野地潤家（一九八五）や竜田徹（二〇一四、二〇一五）により実証的に検討されてきた。光村図書の中学校の教科書（平成二八年版）では各学年の終わりに一年間（三年生は三年間）の学びを振り返る単元が設定されており、国語学習の振り返り（回想）が学習活動（学習材）として機能することへの期待が窺える。また中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」[1]において「主体的な学び」が標榜され、その具体的な手立てとして「見通しと振り返り」が示されている[2]ことからも、学習を振り返ることの重要性が今後さらに意識されていくと考えられる。

その一方、回想という営みは本質的に不確かさを伴うものでありながら、その内実については十分に言及されてこなかった。そこで本稿では、国語学習回想の意義を検討していく際にどのようなものとして〈過去〉を捉えていけばよいのかを哲学的論考を中心に考察する。

2　「〈過去〉は語られることによって存在する」とは

私たちはしばしば、私の内部に〈過去〉があると思っている。例えば野地の言う「国語学習の極印」について「置かれている状況によって、また時間の経過にしたがって、自分が経験した国語学習の記憶の質・量やその語り方は変化していくと思われるが、そうした変化のなかで、絶えず自己の内側にあって、自分の国語教師として

の歩みや言語生活者としての歩みに働きかけ、それを支え、励ましてくれるもの[3]」と説明がなされるように。だが〈記憶〉という側面からみるとそれは〈過去〉のものではない。「記憶は、過去のものでない。それは、すでに過ぎ去ったもののことでなく、むしろ過ぎ去らなかったもののことだ。とどまるのが記憶であり、じぶんのうちに確かにとどまって、自分の現在の土壌になってきたものは、記憶だ。[4]」と長田弘（二〇一二）が述べるように。

私たちは〈過去〉にあったことをいま〈記憶〉している。〈記憶〉していることは〈想起〉によってつまびらかになるが、では〈想起〉とはどのような出来事なのか、また〈想起〉にとって〈過去〉はどのような存在であるのか。大森荘蔵と野矢茂樹の過去論を手がかりに考える。

2．1．想起的存在としての〈過去〉 ―大森荘蔵の過去論―

大森は、〈想起〉を言語的なものとして捉え、〈過去〉はその中に存在すると考えた。[5]〈想起〉によって立ち現われるイメージには過去性のしるしはなく、過去形で語られることによってそれは〈過去〉のものとなるからだ。[6]また大森は〈想起〉を「過去のオリジナルの初体験」であると述べる。[7]〈過去〉にあったことを再び経験しているのではなく（それは不可能であるが）、〈想起〉においても〈過去〉そのものが初めて経験されるというのである。大森は〈過去〉そのものが〈現在〉に「想起的」に登場すると述べ、〈過去〉の現在性を強調する。

過去は既に存在しないのだからそれが現在登場できるわけがない、というのが誤りだということです。すなわち、過去はまだ存在している、ということです。（中略――引用者）去年死んだ犬を現在私は肉眼で見ることも手で撫でることもできないことは当たり前です。しかし、その犬はその「生前の姿」でまざまざと「思い浮かぶ」のです。ここで、肉眼で見たり手で触れたりすることを「知覚」と呼び一方、「思い浮かぶ」ことをそれに対して「想起」と呼ぶならば、その生前の犬は「知覚的」には存在しませんが「想起的」には今なお存在しているのです。[8]

さて今ここに知人の写真があるとします。私は一眼みてそれがAの古い写真だとわかります。このとき私はAを「思い浮かべた」はずです。それは十年以上も前の写真で、そのAはまだ黒々とした髪の毛をしています。つまり、若き日のAが今「思い浮かんだ」のです。（中略――引用者）ところがこの「若きA」その人もまた今私の心に「思い浮かんで」いなければなりません。もしそうでなければ、同じく「思い浮かんでいる」ところの「写し」が一体誰の写しであるのかわからないはずだからです。（中略――引用者）ところが今私にはそれが若きAその人の姿であるとわかっているのです。ということはすなわち、その「若きA」がまた「思い浮かんでいる」ということです。[9]

確かに〈過去〉は〈現在〉に「想起的」に（＝言語的に）存在すると考えることは可能である。思い浮かんでいるものが〈過去〉の

写し（コピー）ではなく原型でなければ、それが〈過去〉であるのかわからないというのももっともである。この論では自ら知覚したものでなければ〈過去〉として認識できないことになる。だが次の引用で中島義道が指摘するように、私たちは自ら知覚しなかったことも「～年前の」という意味付与によって〈過去〉として捉えることが可能である。

なるほど「コピー」という言葉には「原型のコピー」という意味がはじめから含まれている。とはいえ、このことは、個々の場合にそこに「（真の）原型が立ち現われている」ことを意味せず、「原型らしきものが立ち現われている」だけで充分なのです。そして、その場合、「原型らしきもの」の五〇年前に録音されたカラヤンの田園交響曲のCD、一二〇年前のウィーンの写真、五〇〇〇年前に制作されたミイラ、一億年前に押し付けられた恐竜の足跡等々のコピーとともに〈いま・ここ〉で私が意味付与しているだけかもしれないのです。[10]

大森が自らの経験に限定的な過去論を展開したのはなぜだろう。中島は、大森が〈過去〉を「〈いま〉をも支配してしまう力を持っている」ものと感じていたからではないかと述べている。

〈いま・ここ〉にいても、かつての戦友たち、かつての青春の風景があまりにも「生き生きと」立ち現われてしまう。それらは抛っておくと〈いま〉をも支配してしまう力を持っている。これは、何であろうか？　そして、こういう体験は、まさにプルーストとは逆に、〈いま〉立ち現われてくる過去が文字通り幸福な過去ではないからなのかもしれません。

こうして、先生は〈いま〉知覚風景がじかに立ち現われるように、それとまったく同じ権利で（同じリアリティーをもって）「過去がじかに立ち現われる」という理論を築くほかなかった。[11]

大森が直接的な経験に根ざす〈想起〉に限られる過去論に固執して維持しようとしたことは、〈過去〉のもつ現在性である。〈想起〉によって立ち現われる〈過去〉は過去形で語られながら〈現在〉に引けを取らないなまなましさを湛えており、だからこそ〈現在〉に影響を及ぼしうる――大森の過去論における〈過去〉を〈現在〉と対等（等価、あるいはそれ以上）の存在として扱う視点を、国語学習の回想の意義を見いだす手がかりとしたい。

2．2．〈想起〉の原因としての〈過去〉――野矢茂樹の過去論――

大森は〈過去〉を想起的（＝言語的）な存在として捉えたが、想起できない〈過去〉は存在しないのだろうか。野矢は、「過去はわれわれがいまそれをどう思い出そうとも、あるいは思い出さなくとも、それとは独立に存在する。私はこの実感を保持したい。（中略――引用者）ひとことで言えば、過去世界は過去物語によって過去物語とは独立のものとして作られると言いたい。[12]」と述べ、〈過去〉を想起的に存在する〈過去〉（＝過去物語）とは別のものとして捉えている。

大森はなるほど過去世界の作り方を述べはした。しかし、そのことと、作られたものが何であるのかは別の話である。

ここで「過去物語によって作られる」という言い方に注意しなければならない。われわれは「その家はレンガによって作られている」という言い方もするし、「その家は伝統的工法によって作られている」という言い方もする。前者は構成要素を意味し、後者は作り方を意味する。「によって」にはいくつかの意味があり、それを混同してはならない。（「そのシチューは彼女によって作られた」から彼女がそのシチューの構成要素であることは導けない。）それゆえ、過去世界は過去物語によって作られるとしても、過去世界すなわち過去物語とは言えないのである。[13]

非言語的な体験の場としての過去自体は、過去物語によって言語的に分節化された過去世界になるのである。その意味で、確かに、分節化された過去世界は現在の過去物語によって作られていると言えるだろう。

だが、そうだとしても、過去世界すなわち過去物語ではない。私は、過去世界をあくまで過去物語の原因として作る。過去物語が過去自体からできごとを分節化するとわれわれはそのできごとを原因として捉えることができるようになる。触発は、ここにおいて因果として捉えられる。いま私が「蝉が鳴いていた」と物語ることは、蝉が鳴いていたというできごとに因果的に引き起こされたものである。つまり、過去物語によって作られた過去世界は、その過去物語を引き起こした原因にほかならない。そして原因と結果は、言うまでもなく、同じできごとではない。また原因と結果の関係はけっして必然的なものではなく、（中略――引用者）かりに過去物語という結果に結びつかなかったとしても、その原因となった過去世界は存在する。なるほど、「蝉が鳴いていた」と語るからこそ、私はその原因となった体験をまさにその語りを用いて「セミの鳴き声を聞いていた体験」として捉える。だが私は過去のその体験を、あくまで私がそのように物語ることとは独立に存在するものとして、語り出すのである。[14]

野矢の論に従えば、想起的に存在する〈過去〉は〈過去〉の部分でしかない。野矢は想起される〈過去〉よりも想起させる〈過去〉のほうが「はるかに豊かなものであるという思いを抑えることができない。語らせる力をもちながら、しかし語られなかった過去。それを「語られないがゆえに存在しない」と、私は言う気にはならない。」[15]と述べるが、なぜ「語らせる力をもちながら語られなかった過去」にも語らせる力があると言えるのだろうか。言いたいのだろうか。

野地（一九八五）では記憶にはないが記録としては残っている国語学習として「夏期作文練習帳」が紹介されている。こうしたことから、語ることができない〈過去〉も存在するという実感は納得ができるが、そうした〈過去〉に語らせる力があるとは言えないように思う。しかし、ながらく思い出せなかったことを急に思い出すということは誰にも経験があるだろう。そうしたことから、語ること

ができない原因を〈過去〉の不在に求めることはできないと考えることは許されるだろう。

なお野矢は〈想起〉の真偽が〈現在〉との整合性によることについて次のように述べている。

> 想起と想像を区別するのは、想像の語りが偽でもかまわないのに対して、想起の語りは真であるべきとされる点にある。偽な想起は訂正されるか撤回されねばならない。
>
> 〈中略――引用者〉
>
> 実際にどのようにして想起の真偽が決定されうるのかを考えよう。われわれに与えられているものは、現在のさまざまなことがらでしかない。他人の記憶、日記や手帳といった記録、物的な証拠、あるいは現在われわれが正しい知識として認めている無数のこと（世界のあり方、自然法則等）。そして、ある一つの想起は、それを取り巻くこうしたもろもろのことがらとの整合性によって、真偽が決定される。もちろん単純に不整合なら偽、整合的なら真とは言えないだろうが、こうした現在のことがらとの整合性をもとにして真偽を考えるしかない。そして確かに、多くの想起はこのようなやり方で実際に真とされているのである。[16]

〈想起〉の真偽が〈現在〉のことがらとの整合性によるということは、〈現在〉のほうが〈過去〉に対して支配的であるようにみえる。〈現在〉につじつまがあうようにしか私たちは〈過去〉を捉えられず（肯定的にせよ、否定的にせよ）、〈現在〉が移り変わる以上、〈想起〉の内容も変化を余儀なくされる。つまり、〈想起〉はある〈現在〉との整合性によって随時変更される不確かなものである。だからこそ私たちは想起されない〈過去〉の存在を積極的に認め、それぞれの〈想起〉が唯一の〈過去〉に還元できることを前提とせずにそれぞれの意義や重要性を認める必要がある。

野矢の過去論における、想起されない〈過去〉の存在を語らせる力をもつものとして認めていく視点は国語学習回想を継続していく意義を考える手がかりとなるだろう。[17]

3　記憶するための〈物語〉
―「思い」をこめてみる―

大森と野矢の過去論は、〈過去〉を言語的ものに限定するのか、非言語的なものも含むのかという相違はあるものの、〈想起〉をきっかけに〈過去〉が立ち上がる点では共通している。そこで、物語りをしていくとはどのようなことなのかについて考える。

小川洋子が「現実を記憶していくときでも、ありのままに記憶するわけでは決してなく、やはり自分にとって嬉しいことはうんと膨らませて、悲しいことはうんと小さくしてというふうに、自分の記憶の形に似合うようなものに変えて、現実を物語にして自分のなかに積み重ねていく。そういう意味でいえば、誰でも生きている限りは物語を必要としており、物語に助けられながら、どうにか現実との折り合いをつけているのです。[18]」と述べるように、私たちはあり

のままには現実を記憶できない。しかし、嬉しいことだから膨らませて記憶できるわけでもないだろう。[19]「自分の記憶の形に似合うようなもの」がどのような形であるか私たちは自覚しているわけではない。ただここでは、〈記憶〉はありのままではないということと〈物語〉であるということに着目したい。

なぜありのままに記憶できないのかと言えば、そもそもありのままに知覚できないからである。野矢は、私たちはあるものをある概念のもとに開ける「典型的な物語」をこめて知覚すると言う。

> 相貌とは、あるものをある概念のもとに知覚することである。そこでいまやわれわれはこう答えることができる。相貌を知覚するとは、その概念のもとに開ける典型的な物語をそこにこめて知覚することにほかならない。ひとことで言えば、われわれはそこに物語を見ているのである。
>
> （中略――引用者）
>
> 相貌は、それをどのような物語の内に位置づけるかに応じて変化する。例えば、泣いている女性が写っている一枚の写真は、それがどのような物語の一場面なのかによって、その相貌を変えるだろう。悲しくて泣いている、つらくて泣いている、あるいはくやしくて泣いているのかもしれない。悲しくて泣いているとしても、そこに読み取られる物語によって、その悲しみの深さや質はさまざまでありうる。その一枚の写真は、前後にどんなストーリーをもつかによって、劇的に異なる相貌をもちうるのである。

われわれが現実に出会うどの一場面も、なんらかの物語の一場面にほかならない。街ですれ違うどの人も、その人なりの来し方と行く末をもっている。道端の空き缶にも、それなりの来し方と行く末がある。どのような物語の一場面と見るかによって、その相貌が決まってくる。あるものをただ「犬として」見て、それ以上の関心を示さないとき、そこに読みこまれる物語は「犬」という語を用いて語られる典型的な物語である。あるいはその犬にさらに「盲導犬として」の相貌を見るのであれば、私はそこに「訓練を受け盲人の歩行の介助を行なう」という物語を読み込むだろう。

相貌には物語がこめられている。一般に、何かを「aとして」知覚するとは、「a」という言葉を用いて語り出される典型的な物語をそこにこめることにほかならない。[20]相貌とは、言語がわれわれに見せる世界なのである。

野矢は「典型的な物語」を「言語によって課される「初期設定（デフォルト）」である」[21]と言う。それは変更可能なもの、変更されることを待っているものと言えるかもしれない。なぜなら世界を言葉で語り尽くすことはできないからである。[22]ある物語は幾通りにも（さまざまなヴァージョンで）語り直すことができる。そう考えると、「典型的な物語」が本当に典型的なものであるかも疑わしい。それは最初の物語（ver. 1）に過ぎないのではないだろうか。本人が典型的とみなしているだけで、あくまで仮のものであり、決定的・絶対的なものではないだろう。

こうした考えはネルソン・グッドマンの論考にもみられる。グッドマンは「多くの世界があるというのは、正確にはどういう意味でなのか。本物の世界をいつわりの世界から区別するものは何なのか。世界は何から作られているのか。世界はどのように作られているのか。その制作にさいして記号はどのような役割を果たしているのか。さらに世界制作は知識とどのように関連しているのか。[23]」という問題意識から、さまざまな世界のヴァージョンが許容される「それらのヴァージョンを包む全体の編成」があり、それは「両価的なあるいは中立的なあるもの」ではないとした。[24]これは「典型的な物語」が唯一のものではないことと同義であろう。またグッドマンは「世界制作はわれわれの知るかぎり、つねに手持ちの世界から出発する。制作（メイキング）とは作り直し（リメイキング）なのだ。[25]」と述べた。世界は私たちによって作られるが、私たちはすでに何らかの枠組みのもとにある世界（典型的な物語、「犬」という言葉によって見える犬）を作り直しているのだとグッドマンは考える。その方法としては（a）合成と分解、（b）重みづけ、（c）順序づけ、（d）削除と補充、（e）変形、の五つが検討されており、これらは先に引用した「自分の記憶の形に似合うようなものに変えて、現実を物語にして自分のなかに積み重ねていく」ことと重なるだろう。

グッドマンは「制作」という言葉で論じたが〈物語〉を制作するとは述べていない。野矢はなぜ〈物語〉という言葉を使うのだろうか。それは〈現在〉の相貌には〈過去〉や〈未来〉への志向が含まれるからである。

だが、それにしても、「こめられている」とはどういうことだろうか。

少なくともそれは表立って考えているということではない。過去、未来、反事実的可能性、そして排除される無数の可能性、そうした物語が織り成す全体を、私がいま表立ってすべて考えているということはありえない。この事情に対する一つのアナロジーはメロディを口ずさむ場合である。ある歌を口ずさもうとして最初の音を口にする。そのとき確かに、最初のその一音にすでにその歌の全体（少なくとも最初の数小節）をこめている。（中略――引用者）その歌の全体のことを頭で考えているわけでもない。私はただ、その歌の出だしの音として、その一音を口にしただけでしかない。フッサール的に言えば、「はー」という歌い出しにおいて私は、「歓喜の歌」ではなく「憧れのハワイ航路」を予持（Protention）しているのである。

もちろん、私が生きているそこはつねに「いま」であり、私が向かい合っているのはつねに現実の事実である。だが、けっして静止した一時点を生きているわけではない。いささか比喩的かつ曖昧な言い方になってもどかしいのだが、私の立っているそこは、静止した点ではなく、運動の途上にあり、一定の方向を示しているのである。（中略――引用者）われわれはそうした運動の方向に対する感受性を確かにもっている。その現われが、相貌にほかならない。（おそらく相貌は、行為ないし行為の意図と密接な関係をもっているだろう。だが、私はまだそうしたことを見通せていない。[26]）

野矢が言うように、〈過去〉や〈未来〉の可能性（全体）をすべて考えることはできない。ただ〈想起〉の真偽が〈現在〉との整合性において点検されるように、見える世界の確かさの感じを〈物語〉という形式（前後の文脈をもつもの）が支えるのだろう。〈物語〉はつじつまの合わないことを排除するのではなく、「物語とはまさに、普通の意味では存在し得ないもの、人と人、人と物、場所と場所、時間と時間等々の間に隠れて、普段はあいまいに見過ごされているものを表出させる器」[27]、「あいまいであることを許し、むしろ尊び、そこにこそ真実を見出そうとする」[28]ものとして機能する。そして私たちは、あいまいなものをあいまいなまま包み込むところに確かさを感じるのではないだろうか。

〈物語〉として捉えることは、時間的な前後のつながりをもつものとしてみるということである。それは語られなかった何かも存在しないわけではないという感慨に寄り添うものである。[29]またそれによって強められるのは、〈過去〉がどのようであったのかという事実の確かさよりも〈過去〉は確かにあったのだという実感である。

4 〈過去〉の存在を実感することの意味

ここまでに取り上げたすべての論者に通底することは、〈過去〉や〈世界〉が確かにあるという実感をどうすれば説明できるのかに力を注いでいることである。〈過去〉は〈想起〉によって立ち上げられる。私たちは〈想起〉による〈物語〉のなかに、生き生きと語られる〈過去〉と、まだ語られずあいまいなままだけれども確かに存在するものとしての〈過去〉を見いだす――では〈過去〉があるという実感がなぜ私たちを支え励ますのか。それは、「見えている」ということが私の存在を支えるように、〈過去〉があるということが私がいたということを支えるからである。

私はこの空間的風景（あるいは、風景空間ともいえる）の中にいるのであり、その中で移動したり向きを変えたり瞼を開閉したりしている。その中で動作主体であるのである。だが「私」は登場していない。つまり、その空間風景が（どんな意味であれ）認識論的に「私に対して見えている」というのではない。吐き気や痛みがただあるように、空間風景はただ見えているだけなのである。吐き気や痛みがただあることの中に何の主客構造の紋様もないように、空間風景がただ見えていることの中に何の主客構造もないのである。私が、「見えている」ことの条件なのではない。「見えている」こと（その状況）が、「私がいる」ことなのである。[30]

国語学習回想にひきつけて言えば、私は確かに学んだのだという実感が自信につながる。それは至極当然のようにも見えるが、私たちは身についたことについてどのように身につけたかを忘れてしまうことも多い。[31]しかしその場合においても、身についているということこそ学びのしるし（痕跡）であり、〈想起〉のきっかけとして認識することは可能である。

身体的記憶は、それが「記憶」であるためには言語的な想起を必要とするのである。身体的記憶はそれ自体では過去への志向性をもたない。それゆえ、身体的記憶を「記憶」として過去に結びつけるものは言語的な想起以外にない。かくして、ここには興味深い構造が確認される。言語的な想起は、その基盤として身体的記憶を必要とする。過去に触発された特定の身体的反応をもたない者は、過去を物語ることもできない。だが、身体的記憶を「記憶」たらしめるには言語的な想起が必要となる。この事情をこんなふうに言い換えてもよいだろう。――言語的な想起という能力は身体的記憶が支え、「身体的記憶」という概念は言語的な想起が支える。[32]

〈想起〉は身についていることを〈過去〉と結びつけるものであり、そのことが私たちを励ますということだけでなく、たとえいま語り出せなくとも、語らせる〈過去〉が眠っているものとして身についている何かを意識することも私たちを支えうる――こうした〈想起〉と〈過去〉の関係への目配りを可能にする手立てとして国語学習回想は機能するのではないだろうか。

5　おわりに
―国語学習の回想に資する〈過去〉の捉え方―

〈想起〉を契機として〈過去〉は起ち上げられる。また〈過去〉は〈現在〉に照らして語られる〈物語〉であり、〈物語〉というかたちであることによって、語られない〈過去〉の存在感はより強められる。そしてその〈物語〉は〈現在〉とともに変化し続ける――以上が本稿で考察した内容の概要である。これらが国語学習の回想にどのように資するか検討したい。

国語学習回想は、〈過去〉を国語学習や言語生活の一面として意味づけて物語ろうとする行為でもある。それは不完全で不確かな〈物語〉かもしれないが、そうだとしても国語学習者や言語生活者として生きてきた実感の発見を助けることはできるだろう。長田が「記憶という土の中に種を播いて、季節のなかで手をかけてそだてることができなければ、ことばはなかなか実らない。じぶんの記憶をよく耕すこと。その記憶の庭にそだってゆくものが、人生とよばれるものなのだと思う。〈中略――引用者〉思いはせるのは、ただ、一人のわたしの時間と場所が、どのような記憶によって明るくされ、活かされてきたかということだ。[33]」と述べるように、国語学習を回想することは〈現在〉に照らして〈過去〉を育てていく主体となる手立てになるはずだ。

なお国語学習回想では語られた〈過去〉に注目しがちであるが、語られる〈過去〉とはある時点の〈現在〉に照らして筋の通る〈物語〉に限定される。〈現在〉とともに可変的なものとして〈過去〉を捉えることは国語学習回想の継続によって〈過去〉を育てる主体を育てることに寄与するだろう。また、語られない〈過去〉もその存在感は語られた〈過去〉や身体的記憶から起ち上げることが可能である。内容や所在はわからないが確かにあったということは感じられるものとして〈過去〉を捉えることは、継続的な振り返りを励ま

すことにつながるだろう。

H・S・クシュナーは人生を良書に喩え、入り込むほど意味を理解でき、細部にも愛情深いまなざしを向けることで作品を誇りに思うことができると述べたうえで、「他者だけが、私たちの人生を通して作り上げた作品がどれほどよいものであったかを記憶にとどめてくれる」と述べている。

ある友人がかつて、人生は質のよいワインのようなものだ、年月を経るごとに価値が高まるのだから、と言いました。私はワインを飲むたびに残りが少なるという意味でその比喩は好きではない、とその友人に話しました。私はむしろ人生を良書と考えたいと思います。本に深く入り込めば入り込むほど、ますます本の世界と一体化し意味を理解するようになります。登場人物を理解する目がしっかりと養われ、その前に書かれた出来事の意味がより明確になります。本の終わりにたどりつけば、完全に読み遂げたという満足感があります。

いうなれば人生は芸術作品です。さらに作品の細部にまで愛情深いまなざしを向けるなら、仕上がった作品を誇りに思うことができるでしょう。（中略――引用者）作家は、自分の本が何百マイルも離れたところに住む知らない人に読まれ、そのような読者にどんな影響を及ぼすかを知ることもないのに、どうして書くことができるのでしょうか？　私たちがそれらの問いへの答えを知るとき、私たちはなぜ、いつの日か命を召されることをよく承知しながら、人生において懸命に働き、自分の人生を通して何かを作り上げるかを理解するでしょう。そして、他者だけが、私たちの人生を通して作り上げた作品がどれほどよいものであったかを記憶にとどめてくれるでしょう。[34]

国語学習の回想は自らの学びに愛情深いまなざしを向け、学んできた私に誇りをもつ契機になる。また国語学習回想という主体的な〈物語〉を他者と分かち合うことには、個別的な学びを対話的・協働的に支えていく可能性もある。それについてはまた別の機会に論じられればと思う。

注

1　二〇一六・十二・二十一

2　「「主体的な学び」の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができることが重要である。」（一三〇頁、傍線は引用者。以下同じ）

3　竜田徹（二〇一四）六四頁

4　長田弘（二〇一二）一二九頁

5 「想起の言語命題から過去実在が構成されるというよりは、それらの言語命題の意味の中に過去実在が与えられていると言いたいのである。（中略――引用者）しかしそれは過去が実在しないということではない。ただ過去なるものが想起という意識の外にそれと独立して実在するのではなくて、想起される命題の言語的意味の中に実在するのだ、と言っているのである。」（大森荘蔵（一九九二）一一四～一一五頁）

6 「だが、想起の様態をもつ思い的立ち現われの相当部分に共通したことは、それらに「かつて知覚的に立ち現われた」という、いわば消印がともなっていることである。」（大森荘蔵（一九七六）『物と心』東京大学出版会、一二一頁）とも述べているが、「かつて知覚的に立ち現われた」という判断はやはり現在の私にされるのであるから、立ち現われ自体に消印が伴っているとは言えないだろう。

7 「まず第一に、想起において立ち現われる過去は差異性と言う維持的な出現ではなく、その過去のオリジナルの初体験だということになる（当然記憶像などは無用のものとして廃棄される）。」（大森荘蔵（一九九九二）一二六頁）

8 大森荘蔵（一九八二）二三三～二三四頁

9 大森荘蔵（一九八二）二三一頁

10 中島義道（二〇一四）一〇四頁

11 中島義道（二〇一四）二三〇頁

12 野矢茂樹（二〇一一）三四七頁

13 野矢茂樹（二〇一一）三四六～三四七頁

14 野矢茂樹（二〇一一）三五〇～三五一頁

15 野矢茂樹（二〇一一）三五一頁

16 野矢茂樹（二〇一一）三四四～三四五頁

17 「学習当時の印象としては、先生の指示に対する「驚き」や、最後まで読ませてもらったという「嬉しさ」であったものが、その後の歩みのなかで繰り返し思い返され、温められ、次第に白田時太先生による国語教育的判断だったことが分かってきたのではないかと思われる。」（竜田徹（二〇一四）六六頁）

18 小川洋子（二〇〇七）二二頁

19 「人間は時として現実をむしろ自分の心をより痛めつける方向に、物語を変えて受け止め」、その物語を悲しむこともある。そのように「現実を無理矢理、受け入れ難い形に物語化」するのは「良心に基づいた物語を獲得するため」であり、それもまた「苦しい現実を乗り越えるための物語」なのである。（小川洋子（二〇〇七）三〇～三六頁、河合隼雄・小川洋子（二〇〇八）七〇～七四頁）

20 野矢茂樹（二〇一一）四〇四～四〇五頁

21 野矢茂樹（二〇一一）四〇七頁

22 「世界を語り尽くすことはできない。そして何よりも、世界は私を驚かしうる。それゆえ、典型的な物語の世界は、私にとってあくまでもスタート地点にほかならない。典型的な物語とは、言語によって課される「初期設定（デフォルト）」であると言ってもよいだろう。私はまず、言語が見せる相貌の世界に立つ。そして、世界の実在性に動かされ、新たな物語へと歩を進めるのである。」（野矢茂樹（二〇一一）四〇七頁）

23 ネルソン・グッドマン（菅野盾樹訳）（二〇〇八）一八頁

24 「それぞれが正しくて、しかも対象をなし、すべてが唯一のものへ還元されるわけではない多くのヴァージョンが存在する。こうしたヴァージョンが許容されるかぎり、それらの統一は、多くのヴァージョンの下にある両価的なあるいは中立的なあるものにではなく、それらのヴァージョンを包む全体の編成のうちに求められねばならない。」（ネルソン・グッドマン（菅野盾樹訳）（二〇〇八）二四～二五頁）

25 ネルソン・グッドマン（菅野盾樹訳）（二〇〇八）二六頁

26 野矢茂樹（二〇一一）四一四～四一五頁

27 小川洋子（二〇〇七）一一八頁

28 小川洋子（二〇〇七）一一八頁

29 「ここであらためて「像＝コピー」と「思い」はどこが違うのかと問わねばなりません。すると、ほとんど違いがないように見えますが、前者が二元論へと導くものであるのに対して、後者が一元論を保持するものであることは明らかです。ここから推していくと、「像」が本物の写し＝コピーであるのに対して、「思い」は本物それ自体であるとみなされていることがわかります。／われわれは普通、知覚的なものを本物と考えますが、本物には異なった二通りの「あり方」がある。一つは、「知覚的あり方」であって、もう一つは「思い的（非知覚的）あり方」です。「六〇年前の運動会」は、そもそも初めから知覚的あり方と思い的（非知覚的）あり方をしているのです。」（中島義道（二〇一四）一三七頁）

30 大森が立ち現われるものを「像＝コピー」ではなく「思い」としての立ち現われであると表現し、そもそも初めから「知覚的あり方と思い的（非知覚的）あり方をしている」と捉えたことも〈物語〉をこめてみることに通じるだろう（大森荘蔵（一九八二）六二頁）。

31 「テスト学力、練習によって確かめられるものというのは、その痕跡が成果が残らないからむなしいというふうには言えないと思うんですよね。習熟していくプロセスですから、ある所までいきますと、それは完全に身につけばもう、忘れられるというのが、おのずからのことですので、技能的なものというのは、そういう宿命を一方でもっているんだと思います。」（野地潤家（一九八五）四七頁）

32 野矢茂樹（二〇一一）三六一頁

33 長田弘（二〇一二）一二九～一三〇頁

34 H・S・クシュナー（松宮克昌訳）（二〇一七）二二五頁

参考引用文献

・大森荘蔵（一九七六）『物と心』東京大学出版会

・大森荘蔵（一九八二）『新視覚新論』東京大学出版会

・野地潤家（一九八五）『国語教育の探究』共文社

・大森荘蔵（一九九二）『時間と自我』青土社

・小川洋子（二〇〇七）『物語の役割』筑摩書房

・河合隼雄・小川洋子（二〇〇八）『生きるとは、自分の物語をつくること』新潮社

・ネルソン・グッドマン（菅野盾樹訳）（二〇〇八）『世界制作の方

法』筑摩書房（初出一九八七、みすず書房）
・野矢茂樹（二〇一一）『語りえぬものを語る』講談社
・長田弘（二〇一二）『記憶のつくり方』朝日新聞出版（初出・一九九八、晶文社）
・竜田徹（二〇一四）「野地潤家述「国語学習の極印と深化」に関する一考察」広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座『論叢　国語教育学』復刊五号（通巻一〇号）
・中島義道（二〇一四）『生き生きした過去――大森荘蔵の時間論、その批判的解読――』河出書房新社
・竜田徹（二〇一五）「国語学習史記述実践の意義と方法――国語科教育における学習者の目標意識の育成に向けて――」広島大学附属中高等学校『国語科研究紀要』四六号
・中央教育審議会（二〇一六）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要等の改善及び必要な方策等について（答申）」
・甲斐睦朗ほか（二〇一六）『国語1』『国語2』『国語3』光村図書
・H・S・クシュナー（松宮克昌訳）（二〇一七）『私の生きた証はどこにあるのか――大人のための人生論』岩波書店

（弘前大学）